

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16H03587

研究課題名(和文) 90年代日韓歴史認識問題に関わるオーラルヒストリー調査研究

研究課題名(英文) The Comfort Women Disputes Between Japan and South Korea in 1990s

研究代表者

木村 幹 (Kimura, Kan)

神戸大学・国際協力研究科・教授

研究者番号：50253290

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日韓関係において最も重要な問題の一つである歴史認識問題の展開過程について、実証的に明らかにしたものである。その主たる成果は、木村幹・金容民・田中悟編著『平成時代の日韓関係』(ミネルヴァ書房、2020年)、及び木村幹『歴史認識はどう語られてきたか』(千倉書房、2020年)の形で公表されている。

この研究成果は、2022年には『歴史認識はどう語られてきたか』の韓国語版が、博英社から出版されるなど、国際的にも評価を得るに至っている。また一般向けにも、その研究成果の一部が、木村幹『誤解しないための日韓関係講義』(PHP新書、2022年)等の形で公表されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は日韓両国間に横たわる最大の外交的懸案である歴史認識問題の展開について、当事者の証言等を通じて実証的に明らかにしたものであり、学術的のみならず、社会的にも大きな意義を有している。その成果は先述の一般書にて公表されたのみならず、研究代表者等の活発な社会的発信、例えば、日本語、韓国語、英語の三か国語による講演やメディアでのコラム執筆、更には日韓両国の政策当局者に対するレクチャー等の形で現実に生かされる事となっている。極めて社会的な実装性の高い研究であると言える。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the issue of comfort women, which is one of the most important problems in the Japan-Korea relationship. It traces back to the 1990s when the escalation began and sheds light on the matter. The main achievements of this research have been published in the book titled "Heisei Jidai no Nikkan Kankei" (Minerva Shobo, 2020), edited by Kan Kimura, Yongmin Kim, and Satoru Tanaka, as well as in Kan Kimura's book "Rekishu Ninshiki wa Dou Katararete Kita ka" (Senkura Shobo, 2020). These publications have received high praise to this day.

In 2022, the Korean edition of "Rekishu Ninshiki wa Dou Katararete Kita ka" was published as "Yeoksa Insik-eun Eotteohke Malhaejigo Issneunga" (Hakyeongsa, 2022), further gaining significant international recognition. Parts of these research findings have also been made available to the general public, such as in Kan Kimura's "Gokai Shinai Tame no Nikkan Kankei Kougi" (PHP Shinsho, 2022).

研究分野：朝鮮半島地域研究

キーワード：歴史認識問題 日韓関係 韓国 日本 ナショナリズム 国際紛争

## 1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦終戦と朝鮮半島における植民地支配終焉から 70 年以上。しかしながら、日韓両国の間においては、依然として激しい歴史認識問題を巡る対立が続いている。その対立は 2012 年 8 月の李明博韓国前大統領の竹島上陸以降、更に深刻なものとなり、この申請書が書かれている 2015 年 10 月はじめの時点まで、日韓両国では首脳会談の開催さえ困難な状況が続いている。

研究代表者の木村は、このような日韓両国の歴史認識問題について、これまで多くの著書や論文を執筆し、それらは日本語、英語、韓国語で出版されると共に、一定以上の評価を獲得してきた。そしてその中で明らかになった事の一つは、日韓両国間の歴史認識問題が単なる第二次世界大戦終戦以前の「過去」に関わる問題である以上に、戦後の両国間の関係の展開に関わる問題だ、という事である。

その中で、とりわけ重要なのは、この紛争が 1990 年代以降に急激に深刻化し現在に至っている事である。教科書問題、従軍慰安婦問題、靖国神社参拝問題、領土問題等、全ての日韓間の懸案を巡る問題は、1990 年代に入ってそれ以前とは異なるレベルの紛争の頻度を見せている。

そして、何故に、日韓両国間の歴史認識問題は、1990 年代以降に急激に悪化したのだろうか。研究代表者の木村はこの点については、2014 年に『日韓歴史認識問題とは何か』(ミネルヴァ書房)を出版し、これに一定の答えを与える事に成功した。しかしながら、当時の状況をより正確に理解する為には、日韓両国の当時の関係者に直接インタビューを行い、資料収集を行う事が不可欠である。幸い、90 年代から 20 年を経た今日において多くの関係者は存命であるが、同時に高齢化が進んでおり、今を逃すと貴重な証言を得る事ができなくなる状況であり、緊急の調査が必要である。

本研究は以上のような背景から開始されたものである。

## 2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、現在日韓関係で問題となっている、歴史認識問題の関係者に対して、大規模なインタビューを行い、オーラルヒストリーを形成し、当時の実態を明らかにする事であった。インタビューの対象は大きく次の二つのグループであった。

- 1) 日本統治下における元慰安婦、徴用工、軍人・軍属
- 2) 80 年代以降の日韓両国の歴史認識問題に関わった政治家・官僚・運動家・ジャーナリスト

この両者は一見、全く異なるグループに属するよう見えるが実際には、大きくオーバーラップしている。何故なら、90 年代以降の日韓間の歴史認識問題において、訴訟等を展開するのは前者であり、これに応じて運動を行い、また、対応を行ったのが後者だからである。即ち、本研究においては、これらの両者に同時にこれらに対するインタビューを行う事で、90 年代以降の日韓両国において、どうして歴史認識問題が深刻な問題として浮上し、現在の状態に至ったかを明らかにする事ができる。

## 3. 研究の方法

90年代以降の日韓両国の歴史認識問題に関わる関係者に直接インタビューを行い、これをテキスト化して学問的に検討し、最終的に研究成果を公表した。インタビューにおいては、研究協力者の臼杵敬子の全面的な協力の下、まず、元太平洋戦争犠牲者遺族会の関係者、次いで、アジア女性基金の関係者に対するインタビューを先行させ、次いでその成果を基盤として検討会を行い、順次インタビュー対象を、同じく90年代以降の従軍慰安婦問題、教科書問題、村山総理「韓国併合法」発言問題へと拡大させていく方針を取った。

調査結果として得られたデータは、インターネット上にクローズドな空間を作って、研究代表者、研究分担者、及び、研究協力者で共有し、併せて適宜これらのデータに対する検討会を定期的に行い、その理解を深める事とした。

その上で、本研究においては、これらの研究対象に関わるデータを時系列と、アクター毎に整理し、研究代表者及び研究分担者、更には研究協力者がその時系列とアクター毎に担当を決めて分析する方法を採用した。

#### 4. 研究成果

本研究は当初の予定以上に大きく発展し、結果として、当初予定していた1990年代のみならず、その後2010年代に至るまでの歴史認識問題の発展過程の全貌を明らかにするものとなった。そこにおいて重要であったのは、1990年代初頭における冷戦的秩序の崩壊と、それと連動した韓国政治の変化と日韓関係の変化が、歴史認識問題の展開に如何に大きな影響を与えたか、であった。

即ちその事は、日韓両国間においてこの時期噴出した歴史認識問題が、単に第二次世界大戦後の終戦処理を巡る問題である以上に、冷戦期から脱冷戦期へと向かう時期に現れた典型的な政治現象であった、という事である。

このような研究の成果は、まずは本プロジェクトの直接的な成果物である二つの書籍の形で好感されている。即ち、木村幹・金容民・田中悟編著『平成時代の日韓関係』（ミネルヴァ書房、2020年）と、木村幹『歴史認識はどう語られてきたか』（千倉書房、2020年）である。この両者の著作は、学会誌のみならず、一般の雑誌や新聞の書評でも取り上げられ、今日まで高い評価を受けている。

また、この研究については、その成果が国際的に発信されている事も重要である。例えば、2022年には『歴史認識はどう語られてきたか』の韓国語版が、

『  
』  
が』（博英社、2022年）として、出版されている。英文においては、Kan Kimura, *The burden of the past: problems of historical perception in Japan-Korea relations*, University of Michigan Press, 2019が本書の成果を交えて公表されている。

一般社会に対する研究成果の発信も多く、その研究成果の一部が、木村幹『誤解しないための日韓関係講義』（PHP新書、2022年）や、山内昌之、細谷雄一編『日本近現代史講義：成功と失敗の歴史に学ぶ』（中公新書、2019年）の一部として公表されている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 Kan Kimura	4. 巻 7(2)
2. 論文標題 Explaining South Korea's Sharp Shift in 2018 toward Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Asan Forum	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 木村幹	4. 巻 27(1)
2. 論文標題 旭日旗問題に見る韓国ナショナリズムの新側面	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際協力論集	6. 最初と最後の頁 21-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81011854	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Kevin Quinn, Kan Kimura	4. 巻 27 (2)
2. 論文標題 Framing Japan's Disputed Past Memories in the United States	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際協力論集	6. 最初と最後の頁 61-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81011969	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 木村幹	4. 巻 19
2. 論文標題 1965年体制について考える：その成立から動揺へ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代韓国朝鮮研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金誠	4. 巻 98
2. 論文標題 総力戦体制における人的資源としての朝鮮民衆：スポーツの否定と兵の動員の正当化へ（特集 うごかし、まなざす身体 1930-40年代における「運動」の諸相）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 民衆史研究	6. 最初と最後の頁 37-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kan Kimura	4. 巻 26(2)
2. 論文標題 Why Were Japan and Korea At Odds Under Conservative Governments?: Japan-Korea Relations in the US-China Rivalry	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際協力論集	6. 最初と最後の頁 61-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金誠	4. 巻 19
2. 論文標題 朝鮮神宮競技大会と植民地空間	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神園	6. 最初と最後の頁 62-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村幹	4. 巻 25(1)
2. 論文標題 日本における慰安婦認識：一九七〇年代以前の状況を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際協力論集	6. 最初と最後の頁 23-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木村幹	4. 巻 25(2)
2. 論文標題 慰安婦言説の転換点 : 千田夏光『従軍慰安婦』を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際協力論集	6. 最初と最後の頁 33-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金誠	4. 巻 44
2. 論文標題 リットン調査団と満洲国建国記念連合大運動会 : 関東軍による宣伝・宣撫工作としてのスポーツ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 札幌大学総合論叢	6. 最初と最後の頁 37-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村 幹	4. 巻 12
2. 論文標題 日韓歴史認識問題とは何か	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 吉野作造記念館吉野作造研究	6. 最初と最後の頁 46-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kan Kimura	4. 巻 Vol. 6, No.8
2. 論文標題 Why Do Immigration Policies Differ Between Japan and Korea	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Sociology Study	6. 最初と最後の頁 490-507
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.17265/2159-5526/2016.08.002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kan Kimura	4. 巻 2016
2. 論文標題 Will the "Comfort Women" Agreement Reduce Japan-ROK Mutual Distrust?	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Joint U.S. Korea Academic Studies	6. 最初と最後の頁 160-173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 浅野豊美	4. 巻 18
2. 論文標題 歴史への感受性を復権させるために : 政治と歴史のはざままで : 歴史認識問題と国際社会 : 「日本の歴史家を支持する声明」が意味するもの	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ワセダアジアレビュー	6. 最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 金誠	4. 巻 16
2. 論文標題 スポーツにみる植民地権力とナショナリズムの相克 : 第11回オリンピック競技大会(ベルリン)の金メダリスト孫基禎を中心に	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 現代韓国朝鮮研究	6. 最初と最後の頁 40-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金世徳	4. 巻 64
2. 論文標題 日本における韓国系学校運営に関する一考察 (一)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 芦屋大学論叢	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金世徳	4. 巻 65
2. 論文標題 日本における韓国系学校運営に関する一考察 (二)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 芦屋大学論叢	6. 最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村 幹	4. 巻 29
2. 論文標題 慰安婦問題の国際化の一側面：戸塚悦朗の回顧を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際協力論集	6. 最初と最後の頁 111～147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24546/81012895	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村 幹	4. 巻 28
2. 論文標題 第二次世界大戦前における「植民地」言説を巡る一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際協力論集	6. 最初と最後の頁 103～135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24546/81012505	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Kan Kimura
2. 発表標題 Politics of the Kono Statement: The Road from Kim Haksun to the Asian Women's Fund
3. 学会等名 Association for Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 Kim Saeduk
2. 発表標題 Another Story of the Comfort-women Movement in South Korea: An Oral History by Yang Sunim
3. 学会等名 Association for Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kin Makoto
2. 発表標題 The Role of Japanese Activists in the Comfort-Women Issue: Keiko Usuki and the Hakkiri-Kai Movement
3. 学会等名 Association for Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 Kan Kimura	4. 発行年 2019年
2. 出版社 University of Michigan Press	5. 総ページ数 249
3. 書名 The Burden of the Past: Problems of Historical Perception in Japan-Korea Relations	

1. 著者名 金誠	4. 発行年 2017年
2. 出版社 塙書房	5. 総ページ数 229
3. 書名 近代日本・朝鮮とスポーツ：支配と抵抗、そして協力へ	

1. 著者名 浅羽祐樹 木村幹, 安田峰俊	4. 発行年 2017年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 240
3. 書名 だまされないための「韓国」 あの国を理解する「困難」と「重み」	

1. 著者名 木村 幹、田中 悟、金 容民	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 360
3. 書名 平成時代の日韓関係	

1. 著者名 木村 幹	4. 発行年 2020年
2. 出版社 千倉書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 歴史認識はどう語られてきたか	

1. 著者名 木村 幹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 P H P 研究所	5. 総ページ数 200
3. 書名 誤解しないための日韓関係講義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	金 誠 (Kim Sun) (40453245)	札幌大学・地域共創学群・教授  (30102)	
研究分担者	浅野 豊美 (Asano Toyomi) (60308244)	早稲田大学・政治経済学術院・教授  (32689)	
研究分担者	金 世徳 (Kim Saedog) (80600098)	大阪観光大学・観光学部・教授  (34434)	
研究分担者	田中 悟 (Tanaka Satoru) (90526055)	摂南大学・外国語学部・准教授  (34428)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 日韓次世代研究者懇談会	開催年 2019年～2020年
-----------------------	--------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------